

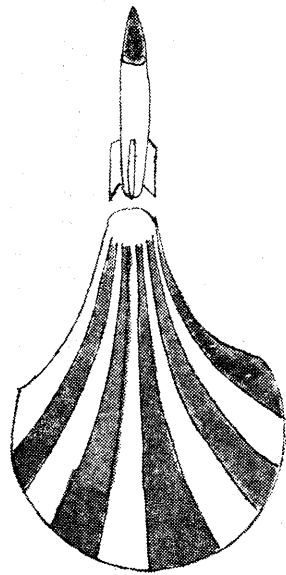
再び “保育の中の小さなこと”

大切なこと” (2)

守 永 英 子

保育室の中にいた私のところに、K子が花を摘んで見せにきた。新学期が始まったばかりの春の庭は、片隅の雑草もかわいい花をつけ、子どもたちは花摘みを楽しむことができる。

K子は三年保育からはいった二年目の子どもで、おとなびて、きついところがある。自分のことはよくできるが、人との関係は、あまりなめらかではない。相手が自分の考えとちがうときは、「○○なのよ。そうに決まってるわよ」と激しく自分の考えを主張し、相手を否定し



た。このいらいらした言い捨てるような言い方は、K子の特徴的なものであった。

そのK子が自分の方から、触れ合いを求めてきたのである。「かわいいお花ね。どこで見つけたの？」と答えながら、私は、K子のこの穏やかな気分の働きかけを貴重なものに感じ、このかわりのときを、もう少し持ちこたえたいと思った。

「みんなにも『K子ちゃん』とか『N子ちゃん』とか、お名前があるでしょ。このお花にも名前があるのよ」と

いう私に、K子は「おもしろそう」という表情をみせた。

「K子ちゃんのお花と似ているお花があるかしら」と本棚から「野の花」の絵本を取り出し探し始めると、K子は興味をもつてのぞきこんだ。そして、私と絵本の間に割り込み、さり気なく私のひざに腰かけた。

どうしたことか！ 私の心に驚きが広がった。K子は、かつて甘えといえるような仕草をみせたことはなかった。おとなの手を振り払い、自分で出来ることを誇る子どもであった。そのK子が……と思う驚きといっしょに、先日のことが思い出された。数人の子どもと庭に出たとき、ふと手をつなぎにきたのがK子だったのである。そのときも、軽い驚きを感じたのであったが、やはりK子は最近変わってきたようである。

「これじゃない？」と、K子は、自分の持っている花と似た花の絵をみつめて、「はるじおん」と読みあげた。

「これ、はるじおん」ていう花なのよね」K子は、花の名前を見つけて、とても満足した様子であった。そして、そばにきたM男が手にしていた小さな黄色の花の名

前も探しはじめた。何度もページをめくり、やっと黄色い花を見つけ、「これじゃない？」と言ったが、どうも葉が少しちがうようである。

考えがくいちがったときのK子の反応は予想できなし、それは決して楽しいものではなかった。私は重い気持ちになって、そつと言ってみた。「そうね。でも、少し葉のところが違うみたいじゃない？」「これよ。そうよ。そうに決まってる……」K子は言いかけて、途中で言葉を取り、穏やかに言い直した。「K子（自分のこと）はそう思うけど……」

私の心に、言いようのない感動が広がった。K子は、自分から意識して言い直したのである。「そうに決まってる……」と言いかけたときも、以前のような強い語調ではなかったが、それを更に言い直したのである。相手否定することなく、自分の意見としての表現であった。私の心に、K子へのいとしさがあふれた。この一年の間に、K子は、やはり確かに変わってきているのである。

M夫の場合は、また違った形で現われた。M夫も三年保育からはいっている子どもであるが、昨年は「なかなか自分から遊べない、遊びに打ちこめない」ということが私の心にかかっていた。分別があり、おとなをこまらせることがなかったが、よく私の周囲にいて、他の子どものことを「あんなことしてる。あんなことしちゃいけないだよ」と私に同意を求めた。ときに「ねんどをしたい」などと自分から言い出すこともあり、それに応じて用意しても、少しさわってみるだけで、じきにやめてしまう。

このようなM夫の様子に心を悩ませながら、かわり方を考え、工夫してきた一年間であったが、なぜ、そのように気にかかるかといえは、それは「M夫の本来の姿と、現実の生活の中でのM夫の姿とのずれ」を感じていたとでもいえるだろうか。

五月の連休が明けて間もない日であった。M夫は、いつものように早く登園してきた。そして、私の顔をみる

や、「幼稚園は絵本しかないから、つまらないなあ」と言うのである。「絵本ばかりだから……」

このM夫の言葉は、私を驚かせた。遊べない子どもといっても、去年一年の間に、いろいろなことをしたではないか。砂場、ぶらんこ、ねんど、積木……そして、男の子たちは、特に、ルールをつないで汽車を走らせることが好きであった。M夫も、いろいろな遊びを経験したはずである。そのM夫が、「絵本しかない」と言う。

突然の出来事に、私には、そのことの意味がのみこめなかった。とまどいながら、後からきたK夫に、「幼稚園には、沢山遊ぶものがあるわ。K夫ちゃん、M夫ちゃんに何があるか教えてあげてね」と言う、まじめなK夫は、「自動車もあるし、砂場もあるし……」と指さした。M夫はその方に目をやったが、また私の方に向き、「だって、朝来てすぐお外(庭のこと)に行ってもいいの?」と問いかけた。

私は、ここでまた、びっくり。今まで、どの子どもも、「おはようございます」と言って、手を洗い、うが

いをすませると、すぐに好きな活動を始めていたではないか。一年間その様子をみてきたのではなかったか。

「いいのよ。どうぞ」という答えに、M夫は、すぐ砂場に出ていった。それから一時間ほど、M夫は砂遊びに熱中し、部屋に戻ってこなかった。M夫が周囲のことを気にしないで、一つの遊びに打ち込んだのは、これが初めてのような気がする。何かが、ふつ切れたようであった。

この不思議とも思える出来事は、朝の出会いのほんの小さな一コマである。が、M夫はこの日を境に、はつきりと変わっていった。このことは、M夫にとって、どういう意味をもっていたのであろうか。M夫は、「自分がとらわれていたもの」と「周囲の情況」とのずれを、修正してもう一度とらえなおし、確認したのであろうか。そして、「とらわれ」から解放され、「心に自由を得た」のであろうか。興味深い出来事であった。

M夫のことも、子のことも、毎日の保育の中では、小

さな小さな一コマである。しかし、K子の言いなおしも、M夫の不思議な言葉も、子どもの心の変化の、確かな証であり、保育者にとっては、素晴らしい感動であった。

子どもの小さな変化にも気づくとき、保育者のその子どもを見る目が変わり、保育者の目が変わるとき、それを受けて、子ども自身の「自己」のとらえも、また変わっていくのではないだろうか。子どもの行動の根底に、子ども自身の「自己」のとらえが大きく横たわっていることを考えるとき、保育の中の、小さなことの、大きな意味をしみじみと思うのである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)